慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間 午前9時～午前11時
●電話(3353)1211(大代表)

KEIO 150
Design the Future

慶應医学賞

満屋 裕明博士 Brian J. Druker博士 来塾

昨年十月、慶應医学賞授賞式・および記念講演のために、満屋裕明博士、Brian J. Druker博士の両氏が信濃町キャンパスに来訪された。貴重なインタビューの時間を得たので、ご報告したい。

満屋博士のエイズ治療薬の開発、Druker博士の分子標的薬の開発、いずれも新しいアプローチによる医療の時代の到来を伺わせる非常に明るく素晴らしい研究として注目されている。研究内容の詳細は当紙でもすでに紹介している通り。義塾のホームページ等もご参照いただきたい。今回のインタビューでは両氏の研究への思いなどを伺った。

【三面に続く】

第2回 N響院内コンサート開催

至高のバイオリンの音色に酔うひとときと

昨年、十二月二十六日午後二時より、新棟十一階大会議室にて、第二回N響院内コンサートが開催された。

今回は、N響第一コンサートマスターを務められる世界でも著名なバイオリンニストの篠崎史紀氏とピアニストの桑生美千佳氏を招いての贅沢なひとときとなった。

会場は、開演を待つ入院患者さんたちで早々に満員となった。『愛のあいさつ』の耳慣れたメロディーが流れると、会場からほため息がもれた。

「音楽は脳に良い刺激を与えるといわれます。皆様、くつろいで過ごしてください」。時折ジョークも交えた楽しい語りとともに、素晴らしい演奏が次々と披露され、会場は拍手で沸いた。

終演後には、篠崎氏らが小児病棟を訪ね、演奏が行われた。N響のスタッフがサンタクロースに扮してプレゼントを配るなか、クリスマスムードの中で子どもたちもなごやかなひとときを過ごした。

「今後も引き続きこのような機会をなるべくたくさんつくっていきたい」と相川前病院長と戸山病院長は語る。

臨床研究発展に期待
臨床研究棟完成

地上五階 地下一階 述べ面積約五千六百平方メートルの長寿命建築

式典の様子

内覧をされる服部禮次郎連合三田会会長と安西祐一郎塾長

一月三十一日午後一時より北里講堂において臨床研究棟の竣工式が行われた。最初に安西祐一郎塾長から設計監理者、建築工事担当である竹中工務店、電気設備担当の関電工、空調設備工事担当の三機工業、衛生設備担当の城口研究所に感謝状が贈呈された。続いて、設計監理者、施工者である竹中工務店、竹中統一社長より記念品目録が義塾に贈呈された。引き続き、披露式が盛大に行われ、安西塾長、末松誠医学部長が挨拶を行い、それを受けて竹中統一社長による祝辞が述べられ、山崎元常任理事の乾杯により祝賀の会となった。

最後に披露式の後施設見学が行われ内部が公開された。この臨床研究棟は、地上五階、地下一階、述べ面積約五千六百平方メートル。別館からの研究室の移動とともに、異なる領域間の研究促進のためのクラスター機能も有している。

また、建物自体も、自由なレイアウトを可能とする建築設備システムと二臨床研究棟の早期建設が期待されている。

高いフレキシビリティが確保されていると共に、環境負荷低減に配慮した長寿命建築となっており、常に進歩する最先端の医科学研究に対応できる施設を実現した。今後、引き続き仮棟、二号棟などにある臨床研究グループがより良い研究、クラスター研究を行っていくための第二臨床研究棟の早期建設が期待されている。

専門外来「メモリークリニック」新規開設

―認知症の正しい理解と早期発見・早期治療のために―

現在、わが国では六十五歳以上の約一割が認知症と報告されており、日本の人口構成の高齢化に伴い増加する認知症の医療は、二十一世紀の大きな課題と考えられています。このような社会的状況を見据え、精神・神経科（科長　鹿島晴雄授）および神経内科（科長　鈴木則宏教授）の二診療科合同で、一月二十一日（月）より中央棟・二階に認知症診療に特化した専門外来「メモリークリニック」を開設しました。

当クリニックは、物忘れなど認知症の中核症状を主訴とする慢性疾患の患者を対象としています。主に、早期の認知症患者に質の高い診療を提供することを主眼としていますが、中等度以上の認知症の診療も対象としています。

現在のところ担当医師は、若いスタッフを中心に神経内科三名、精神・神経科三名より構成され、科を超えた診療体制をとっているところが大きな特徴です。一人の患者を神経内科医、精神・神経科医が各々一度は診察し、専門の異なる医師二人により総合的に診療し、個々の患者の症状に応じて神経内科医もしくは精神・神経科医がのちの外来診療を担当します。また、種々の高次脳機能の検査を用いて、客観的な認知機能評価を重視した診療を確立しております。さらに、二診療科合同で、定期にカンファレンスを開催し、綿密な症例検討と診療レベルの向上に取り組みます。このような診療科を越えた共同診察形態は、本院では初であり、現在医学部病院で進行中の診療クラスター構想の一端を担うものといえます。

当クリニックは、介護保険の早期からの利用や患者への対応の仕方を指導するなど、御家族の支援も行っていきます。すなわち、かかりつけ医および福祉施設・地域社会との連携の中で中心的な役割を果たすことを目指しています。さらに、一般的な健康管理が円滑かつ迅速に行われるよう、当クリニックに通院する同時に自宅近隣のかかりつけ医や地域の病院を主治医として持つことをお勧めしています。

関連して、認知症の診断・治療に関するセカンドオピニオンの求めにも積極的に応じています。

認知症を代表とするアルツハイマー病（AD）は、一九〇六年に最初に報告されてから、その診断、治療は大きな変革を迎えようとしています。

病理学、生化学そして分子生物学の融合によりその分子病態が解明されつつあり、治療のターゲットが明らかになってきました。特に、ADの病態メカニズムとして提唱されたアミロイドカスケード仮説は、基礎医学的にはすでに確立したものと考えられます。今後は、神経内科、精神・神経科をはじめとする臨床医学による検証の時を迎えようとしています。現在、アミロイド蛋白をターゲットにしたPETの開発により特異性の高い早期診断、発症前診断が可能となりつつあります。さらに、アミロイドワクチンをはじめとした根本治療が現実的なものとなってきました。その中で、当クリニックは、世界の認知症診療のイニシアティブをとれる存在となることを大きな目標として

写真向かって左から、伊東大介、小堺有史、言語聴覚士　斉藤菜穂、藤澤大介、クラーク宍戸由貴、佐々木貴浩

月曜日から土曜日の午前中に行っております。初診の場合、一人十五分から三十分程度の枠を設けて診察しています。当クリニックの受診を希望される方は、慶應義塾大学病院地域医療連携室（直通電話03-3353-1889）にご連絡ください。本クリニックの開設の趣旨をご理解いただき、広くご利用ご活用いただきますようお願いいたします。

（伊東大介　内科選任講師71回）

新年祝賀式および坂口基金贈呈式　挙行

一月五日、病院新棟十一階大会議室において、二〇〇八年の新年祝賀式、「坂口光洋記念慶應義塾医学部振興基金」贈呈式が行われた。

新年祝賀式は塾歌斉唱のあと、年頭の挨拶として末松誠医学部長が、昨年十一月に、慶應医学部振興基金の施設建設を考えるにあたり、創立一二五年当時の立一五〇年における記念事業として、新しい医療の一致団結の努力をお願いしたいこと、本日の会長より、三四会は医学部とともに一致団結して福澤、北里両先生の建学の想いを忘れず哲夫君（65回）の二名が奨励研究採択者として表彰された。引き続き安西祐一郎塾長より助成金が贈呈され、その後二名から謝辞と研究内容の紹介があり、閉式となった。

末松誠医学部長のあいさつ

信濃町リノベーション

〈序　章〉2008

今年は慶應義塾創立一五〇年を迎える。本塾の一員として、いままでの塾ないしは医学部の歴史の上に立って、医学部三四会員はこれからどのように考え、どのように行動していったらよいのかが問われている。

新・信濃町リノベーションは、序章として一月五日に開かれた新年祝賀会における末松誠医学部長の挨拶の抜粋からスタートする。

◆◆◆